

百聞不如一見 ——伊勢堂岱遺跡の遺構(1)——

五十嵐 一治*

はじめに

秋田県教育委員会は大館能代空港開設に伴うアクセス道路整備のため、北秋田郡鷹巣町脇神地内に所在する伊勢堂岱遺跡の発掘調査を実施した。平成7・8年度の2ヶ年にわたる発掘調査で3基の環状列石を確認し、秋田県当局は平成8年11月に発掘調査の中止とアクセス道路の迂回および遺跡の現地保存を決定した。平成9年度からは鷹巣町教育委員会による詳細分布調査が始まり、遺跡の立地する台地全域の利用状況等の把握および環状列石周辺の調査が進められた。その結果、県教委がボーリング調査を実施した環状列石Cの配石列を平成9年度に確認し、また環状列石Cから南南東に約20m離れて隣接する環状列石Dを平成12年度に確認した。そして平成13年1月29日に伊勢堂岱遺跡は国史跡に指定された。^(註1)

県教委の調査では調査区内に竪穴住居跡等、生活に係る遺構をほとんど検出せず、町教委による調査でも傾向は同様である。また環状列石周辺には多数多様の土壙墓を検出しており、これら環状列石の広がる台地縁辺部に検出した多くの土壙墓群については、環状列石構築前後にかけて変遷する墓域を形成していたと考えられる。

大型不整形の土壙墓と祭祀関連遺物

発掘調査で検出した土壙墓は86基である。形態により、①再葬墓と考えられる集合土坑様を呈する大型不整形の土壙墓33基、②小判形土壙墓27基、③円形土壙墓13基、④配石墓7基、⑤その他の土壙墓6基に分類した。このうち②～④は環状列石構築前から構築後まで継続して出現する形態であるが、①は環状列石構築により廃絶する土壙墓形態である。^(註2)

大型不整形の土壙墓は集合土坑様の平面プランを有し、埋土はレンズ状を呈する。②～④の一括埋め戻し(=遺体埋葬)の土壙墓に比べると自然堆積の様に見えるが、埋土中に薄くロームを貼っている面や焼土・炭化物等による面の形成が確認できることから、埋め戻しを意図することはなかったにせよ人為的埋土であると考えられる。この場合、土壙に対する埋土行為に伴う土量はごく少量で、レンズ状を呈する程度にとどまる。この過程においても時折凹地としての面を確保するかのように掘り返し・拡張が繰り返され、その断面形状が袋状を呈する場合も多い。リン分析および脂肪酸分析では、同一土壙墓の複数面から遺体の痕跡を確認し、それらは骨に由来する可能性が示唆されている。つまりこの土壙へは再葬を目的として遺骸(骨格)が葬られ、その行為自体が同じ平面位置に対して繰り返された結果、集合土坑様のプランを有するに至ったと考えられる。この土壙墓は環状列石周辺に多く位置するが出現時期は環状列石より若干古い。また埋土最上位の凹地に焼土面を持つものが多く見られ、その上部を列石A構築の際の削土が覆う事実が確認できる。すなわちこれらの集合土壙への廃絶行為として火を焚く(焼土面を形成する)行為を行った後に列石Aが構築され、祭祀の対象・場所が転換したものと考えられる。列石A構築の際の削土によって埋められた沢Bの埋土には、あたかも貝塚の貝層のように多量の焼土粒を含む土が単位を持って何層にもわたって投棄され、層中からは削平され

* 秋田県埋蔵文化財センター南調査課学芸主事

た土壙墓起源の遺物が多く出土した。つまり前記した凹地に火を焚く(焼土面を形成する)行為は、環状列石構築時に開口していたすべての当該土壙墓に対して行われた可能性が高い。

これらの事実から、この土壙墓は柱穴や土坑など既存の遺構位置を初源として、繰り返し凹地としての面を形成・確保しながら追葬を繰り返す多遺体再葬墓と捉えられる。また遺構埋土のみならず遺構の掘り込み面よりも上位の堆積層準にわたって多量の祭祀関連遺物が出土することから、埋没し凹地へと変化した段階に至るまで追善供養的な祭祀が継続していたと考えられる。^(註3)

この土壙墓の埋土および上位の層準にかけては、鐸形土製品・土偶・三脚石器・三角形岩版(盤状礫を打欠いたタイプ)・円盤状土製品(土器片利用)などの祭祀関連遺物が多量に出土し、また複数の当該土壙墓から出土した土器および土偶等が接合する場合もあり、該期におけるそれぞれの大型不整形の土壙墓位置(最終的には様々な凹地)の違いは、出自の違い等に起因する祭祀対象位置の差異とも考えられる。これらの祭祀関連遺物は出土状況により、

A(鐸形土製品・土偶)／B(三脚石器・三角形岩版)／C(円盤状土製品)

という3群に分類できる。また出土総数に対する遺構内出土(遺構埋土中；遺構掘り込み面より下位の遺物)の割合により、B→A→Cの順に大型不整形の土壙墓からの出土傾向が強くなること、およびB→C→Aの順に遺構内出土の傾向が強くなることが明らかになった。ただし遺構内出土の割合と説明しているものの、最も高いもので2割強の数値であり、一括埋め戻し(=遺体埋葬)の土壙墓における副葬品とは違う意味であることに注意する必要がある。整理すると次のようになる。

(1) 三脚石器および三角形岩版は土壙墓全体について普遍的な遺物であるが、土壙位置に対する上位への送り、つまり土壙墓全体における追善供養的な行為への使用が想定できる。

(2) 鐸形土製品および土偶は土壙墓全体について普遍的ではあるが大型不整形の土壙墓で比較的多く出土し、土壙位置に対する比較的下位への送り、つまり当該土壙墓およびその他の土壙墓での死者祭祀(再葬)に伴う送り、あるいは標識としての使用が想定できる。

(3) 円盤状土製品は大型不整形の土壙墓で多く出土し、土壙位置に対する下位～上位への送り、つまり当該土壙墓における死者祭祀および追善供養的な行為に至るまでの汎用的な使用が想定できる。^(註4)

以上のように伊勢堂岱遺跡に特徴的な大型不整形の土壙墓は、県内の鹿角市高屋館跡・能代市真壁地遺跡・田沢湖町潟前遺跡等に類例があり、県外でも青森市小牧野遺跡等で確認されている。^(註5)

伊勢堂岱遺跡の本報告では編集の都合から写真図版を8頁しか掲載できず、当該土壙墓が祭祀変遷の鍵をにぎっているながら実測図しか提示できなかったことは断腸の思いであった。刊行後、機会を得て少しずつ成果の発表に努めはしたが、百聞は一見に如かず。このたび土壙墓を中心に写真図版を掲載し、図版解説を試みることにした。

註1 鷹巣町教育委員会 『伊勢堂岱遺跡詳細分布調査報告書』(1)～(4) 鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第4～7集 1998(平成9)～2001(平成12)年

註2 秋田県教育委員会 『伊勢堂岱遺跡』 秋田県文化財調査報告書第293集 1999(平成11)年

註3 五十嵐一治 「秋田県伊勢堂岱遺跡における墓域」『第20回記念シンポジウム発表要旨―北日本における縄文時代の墓制―』 南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム実行委員会 1999(平成11)年

註4 五十嵐一治 「環状列石構築直前の土壙墓と祭祀関連遺物」『青森県考古学』 第12号 2000(平成12)年

註5 平成13年10月28日の小牧野遺跡現地説明会にて、調査担当者の児玉大成氏のご教示。

環状列石Aの手前が沢B。列石A構築時には多量の遺物を含んだ削土がこの沢を埋め尽くすように入れられた。また列石A構築後の祭祀に際しても祭祀遺物の送り場として使用される。

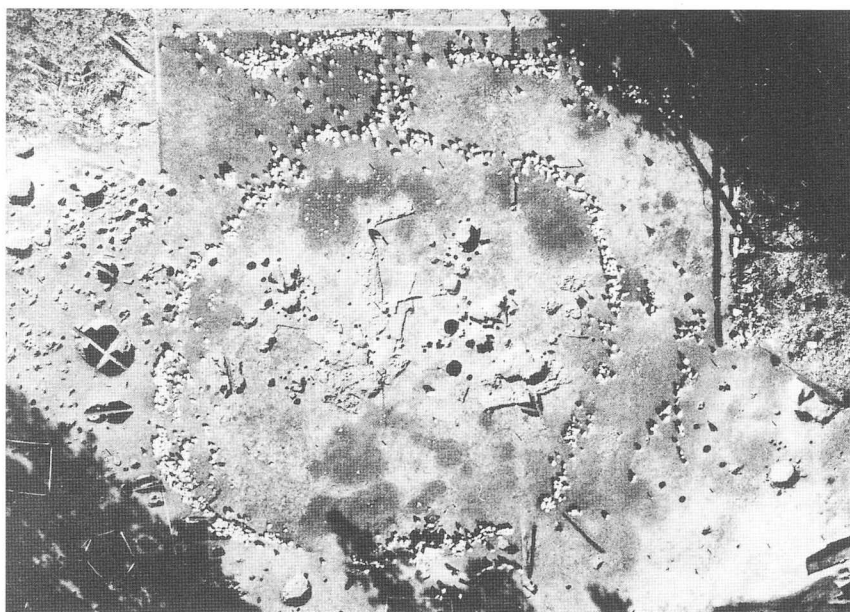
空港アクセス道路の橋脚が目前に迫る。写真奥は世界遺産の白神山地。平成8年夏撮影。

西側調査区 (東から)



環状列石Aの北～東側は2重の配石列になっており、真北方向には出入口様の配石が見られる。町教委のボーリング調査では若干北側に拡大することを確認している。なお東側の外側配石列は外周の掘立柱建物跡の柱穴と重複して新しく、列石Aでも新しい部分である。

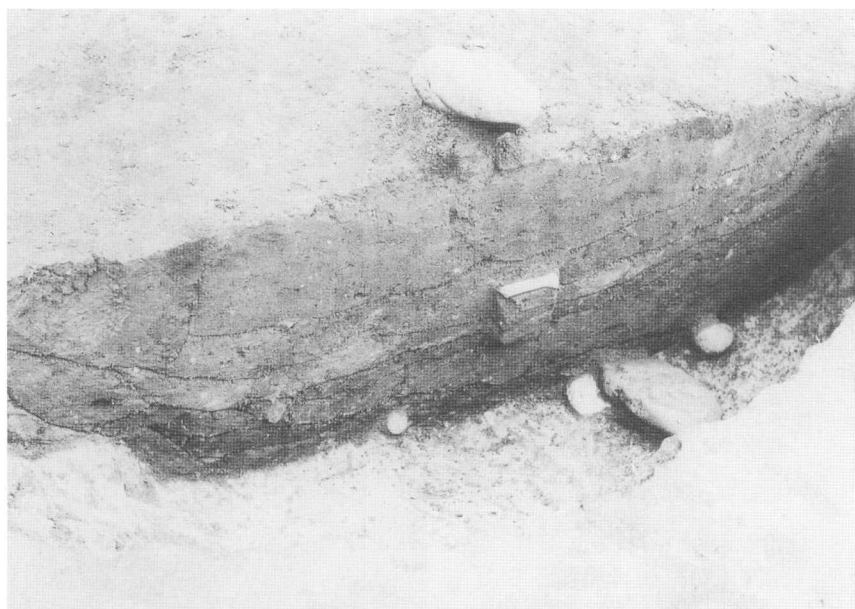
環状列石A (上方が北)



環状列石Aの南側には多数の柱穴を検出したが、そのほとんどは列石A構築時の削土で覆われていた。これらの柱穴で構成される掘立柱建物跡の大部分は、列石Aと正反対の方向に弧を描き配置した。このことから調査区外南側に列石Aより古い環状列石Cの存在を予測し、ボーリング調査で確認した。

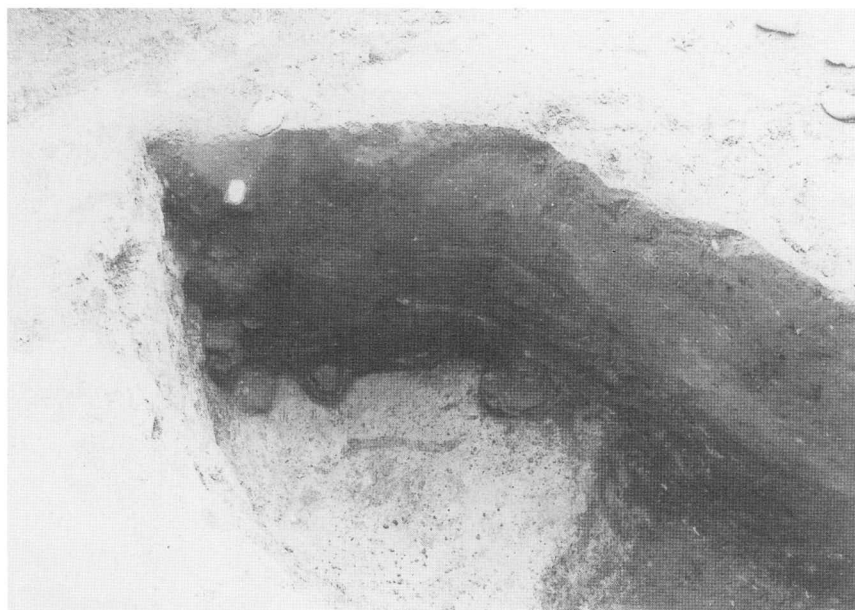
環状列石C外周の掘立柱建物跡群 (東から)





埋土中位にロームを貼った面を確認できる。上下の層中には焼土粒・炭化物粒が目立つ。

S K S 1 4 (北東から)



ロームを貼り付けた面が確認できるが、本来的には遺構掘り込み面より上位から連続する層準だと思われる。埋土上位に配石を確認している。

S K S 2 8



埋土中で確認した完形遺物（本報告の第131図1）。この状態でベンガラを塗付したかのような出土状態であった。再葬の際の副葬品と思われる。

S K S 2 8 (東から)

埋土中位～下位にかけて、ロー
ムを貼り付けた面を確認した。こ
の層準には焼土粒・炭化物粒も多
量に混入している。

S K S 2 9 (東から)



比較的大型の集合土坑様を呈す
る土壇墓だが、新旧があるわけ
ではなく、繰り返しローム貼り付
けによる面形成が行われた結果で
ある。焼土粒・炭化物粒も多く、遺
物も面に沿って出土する。

S K S 3 1 (南から)



この形成面は袋状の掘り込みや
拡張を伴うことも多い。一定規模
の凹地として面確保をしたうえ
で、再葬に伴う祭祀が行われてい
たと考えられる。

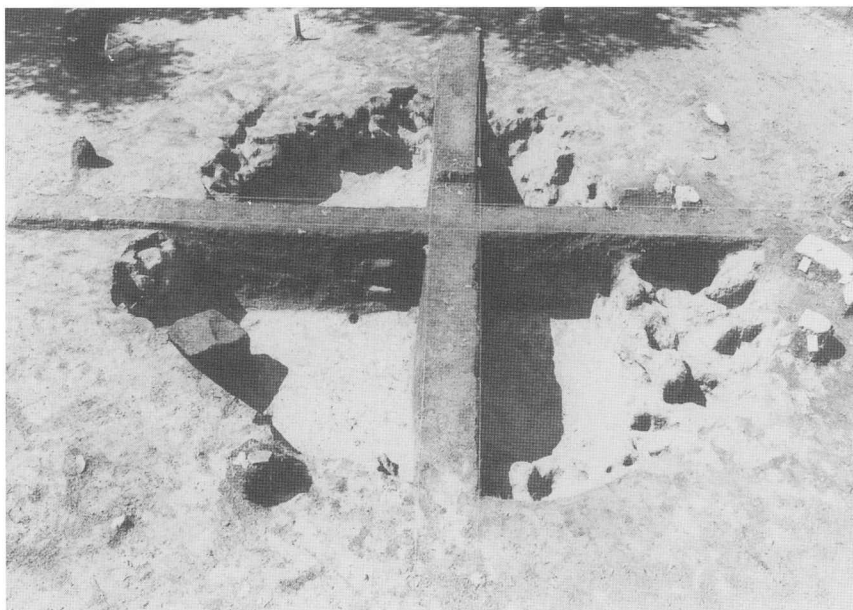
S K S 3 1 (南から)





面確保のための拡張を繰り返し、
最終的な平面的広がり4mを超
える大型のものも多い。

SKS31 (東から)



元来は円形土壙墓であった土坑
位置が、大型不整形の土壙墓へと
転用されたと考えられるもの。周
囲に小ピットが巡る。

SKS38A (東から)



ローム貼り付けによる形成面に
沿った焼土面を複数検出し、再葬
の際に焼土形成を伴う祭祀が執り
行われた可能性を示唆している。

SKS38A (南から)

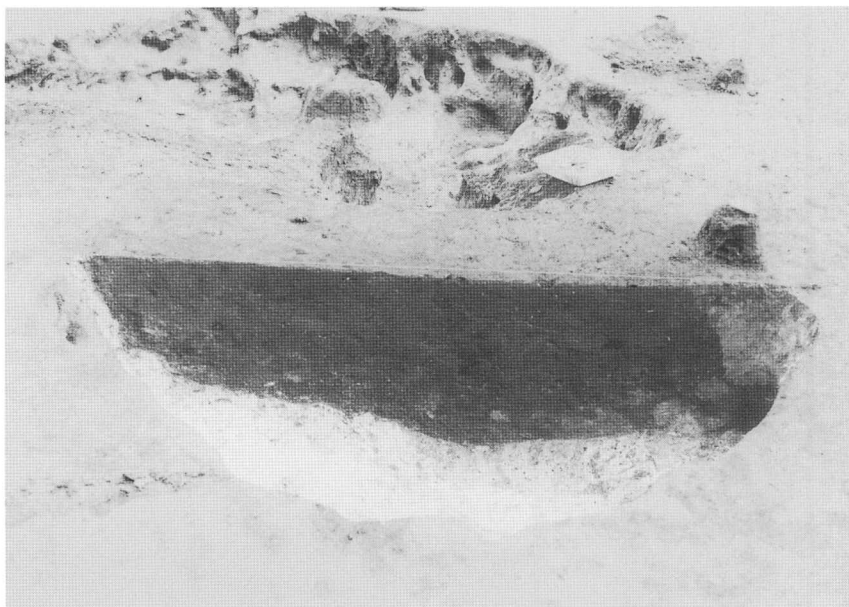
複雑な平面プランを呈するが、
周囲に小ピットが巡る。円形土壇
墓を初源とするものかもしれな
い。

S K S 4 0 (西から)



ほぼ小判形の形状を呈するが、
一部が袋状に掘り込まれ、S K S
4 5 B と一連のものとなってい
る。

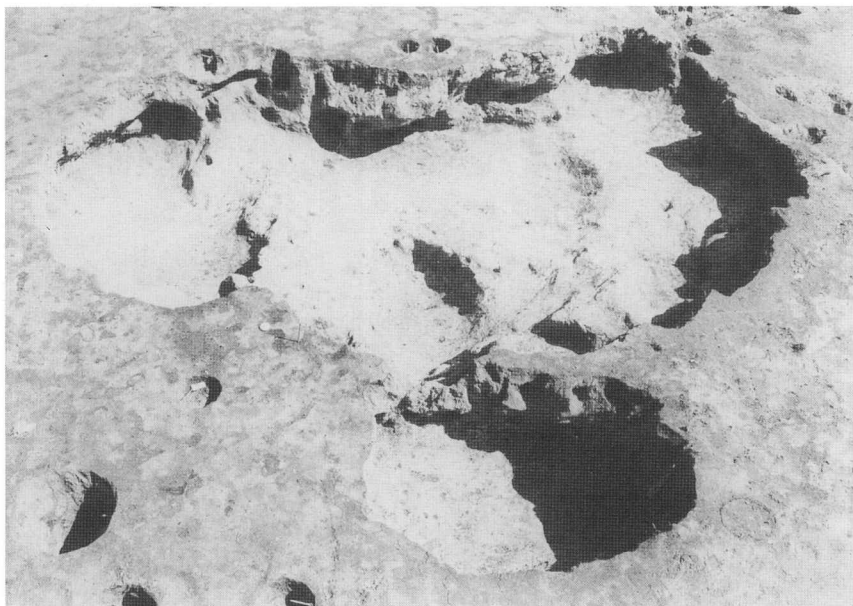
S K S 4 4 A (北から)



埋土上位には多くの祭祀関連遺
物を含むが、本来的には遺構掘り
込み面よりも上位から連続する層
準だと思われる。弧状を呈する環
状列石Bの想定外周を巡る掘立柱
建物跡がほぼ真上に構築される。

S K S 4 5 B (西から)





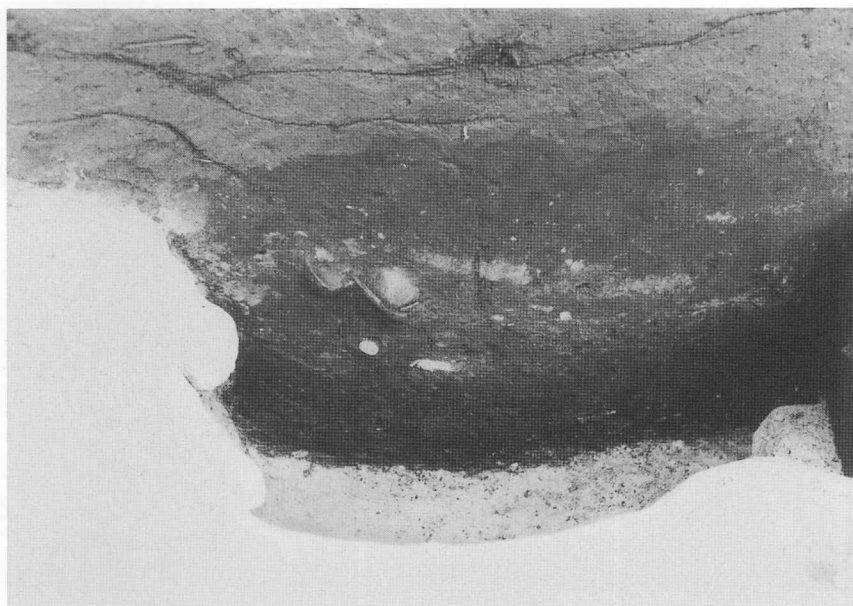
袋状に拡張された部分を多く含む集合土坑様を呈する。平面規模は4mを超える。再葬を繰り返した後に埋没凹地と化してからも多くの祭祀関連遺物が入れている。

SKS44A～45B
(西から)



焼土粒・炭化物粒を多く含み、面的に出土する遺物も多い。フラスコ状土坑を初源とするものかもしれない。

SKS104



ローム貼り付けによる形成面に沿って遺物が出土している。

SKS135 (東から)

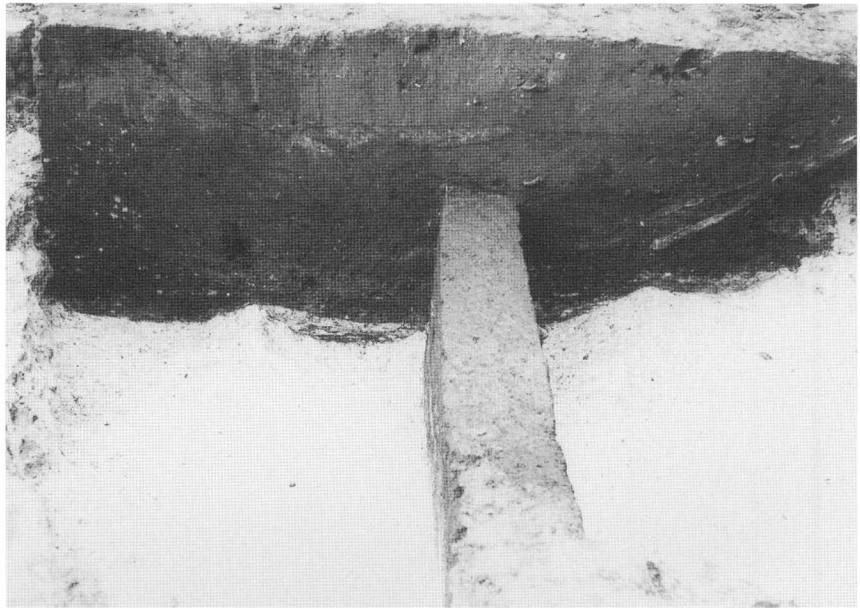
大型の板状土偶（本報告の第212図2）の出土状況。このほかSKS282・476Aでも同一個体の土偶破片が出土した。同一個体が分割納置されたこれら大型不整形の土壙墓は、被葬者の出自に関連するのかもしれない。

SKS135 （南東から）



ローム貼り付けによる形成面に沿って焼土面が形成されている。また同様の出土状況を呈するチップ(碎片)集中範囲も検出した。

SKS136 （西から）



底部穿孔した土器の出土状況。

SKS136 （東から）





形成面上での遺物出土状況。

SKS204A (北から)



埋土下位での面形成の状況。

SKS204A (南から)



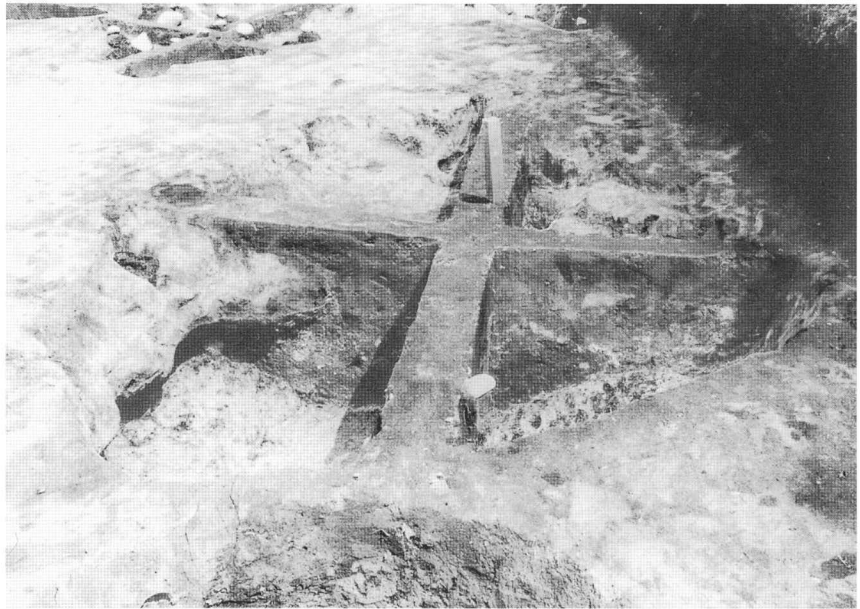
フラスコ状土坑を初源とする大型不整形の土壙墓。埋土上位の凹地状の部分には、環状列石Aを構築する際の多量の焼土粒・炭化物粒を含む削土が充填されている。またそれと重複して新しい柱穴も確認できる。

フラスコ状土坑を初源とするものには、古手の遺物が出土する傾向がある。

SKS272 (東から)

ローム貼り付けによる形成面、
袋状の掘り込みが確認できる。

SKS276A (北西から)



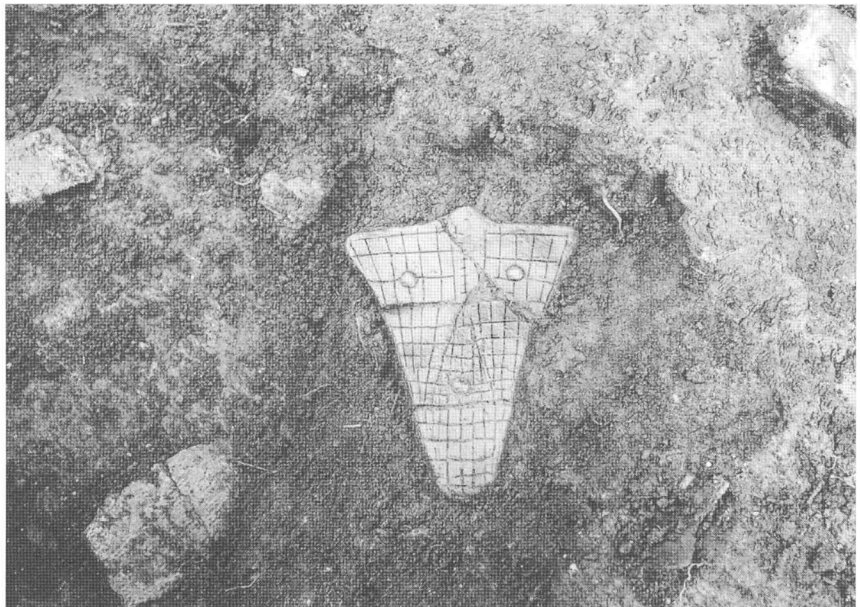
各形成面毎に多量の遺物が面的
に出土する。

SKS282 (西から)



板状土偶(第212図1)の出
土状況。頭部はこの付近の約20cm
上方で遺構外出土遺物として取り
上げられている。つまり遺構掘り
込み面より上位の層準からの出土
となるが、本来的には数面上位の
凹地(面)に分割納置されたものと
考えられる。

SKS282 土偶出土状況





この遺構においてはローム貼り付けによる面形成が、比較的下位の段階から広範な規模で行われていたことが確認できる。出土遺物も形成面に沿って出土する。

SKS282 (南から)



この遺構ではローム貼り付けによる面形成の際に、ローム上面が焼土化している部分を確認した。何らかの死者祭祀に伴う行為と考えられる。

SKS286B (西から)



各面毎に敲磨器類を含む礫が納置されていることが確認できる。

※本報告43ページの遺構分類表中8行目に「SKS-a 286A」とあるのは「SKS-a 286B」である。

SKS286B (南から)

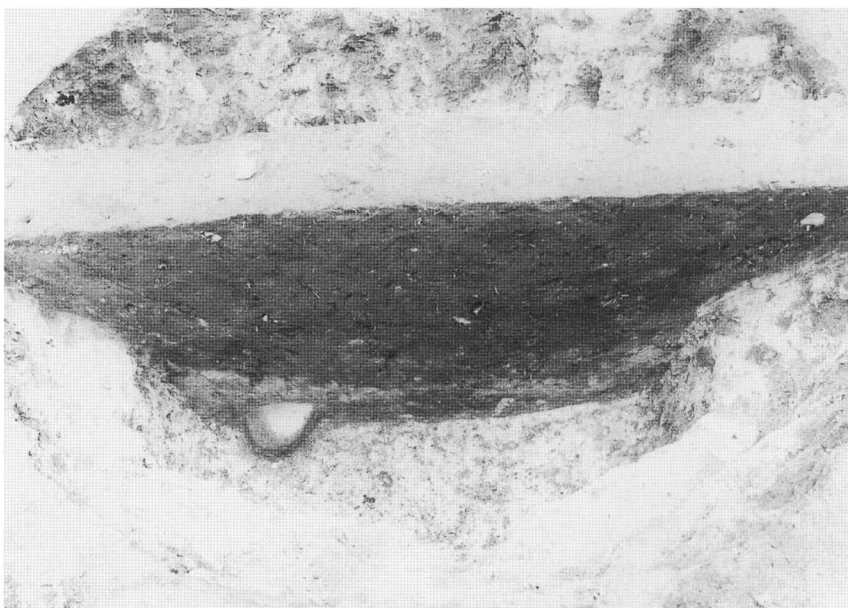
初源土坑を重複して新しく掘り返し、ローム貼り付けによる面形成を行っている。断面右側は棒状礫が配されたSKP289Aであるが、SKS289Bに附属するピットと考えられる。

SKS289B (南西から)



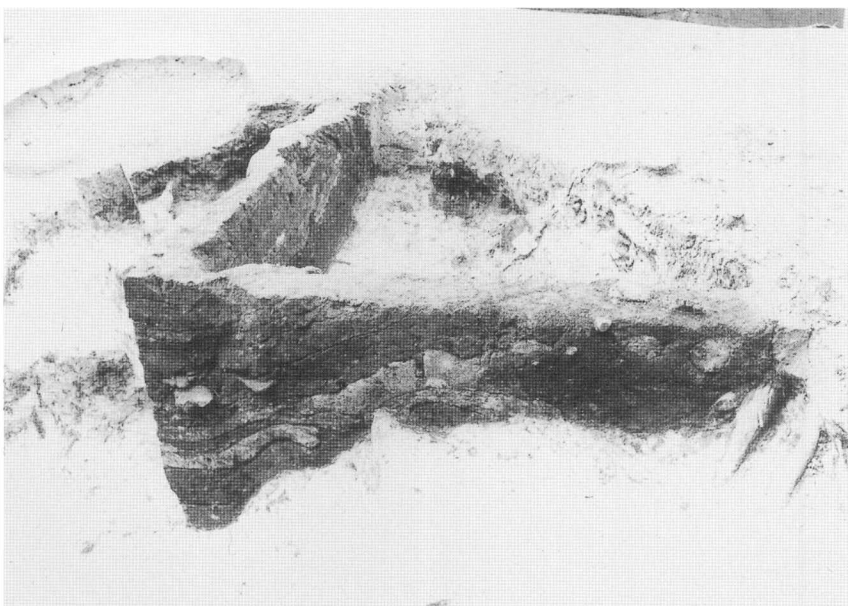
略円形の土壇墓形態を呈するが、埋土中位～上位は拡張による面形成を行っている。

SKS294 (南西から)



長軸4mもの平面プランを有する集合土坑様の土壇墓。ローム貼り付けによる面形成が顕著で、拡張等の単位もわかりやすい。

SKS400 (南から)





写真の完形土器を副葬した面の次の段階では、拡張を伴う面形成が行われている。

SKS400 (南西から)



埋土下位の形成面で敲磨器類が出土した状況。面に沿って焼土粒・炭化物粒が多量に堆積している。

SKS400 (東から)



埋土観察により面形成の変遷を追うと、この土壙墓の場合は写真右端の柱穴様のプランが初源^(註3)であったことが確認できた。最終的には遺構掘り込み面より上位の層準から連続する凹地へと変化し、祭祀土坑的に使用される。

SKS400 (西から)

形成面ごとに掘り下げた状況。
面的な遺物の出土状況が確認できる。

SKS400



完掘状況では重複して新旧を持つ集合土坑の様に見える。周囲に小ピットも巡る。

SKS400 (西から)



フラスコ状土坑を初源とし、
ローム貼り付けによる面形成・拡張を繰り返したと考えられるものは、若干古手の土器が出土することが多い。

周囲に礫を配した小ピットが巡る。

SKS404A (南から)





埋土下位の形成面での遺物出土
状況。

SKS404A (北西から)



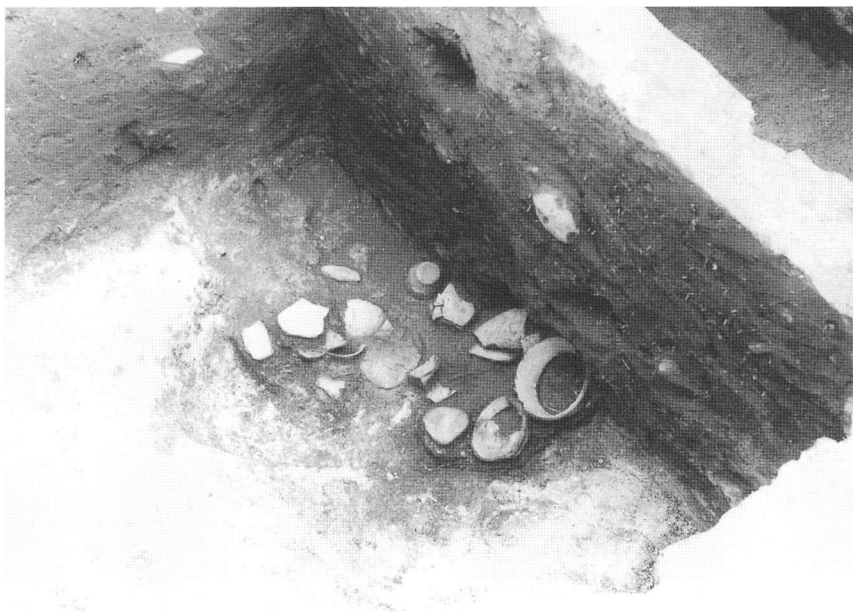
この遺構の周囲を巡る小ピット
には礫が配されていた。何らかの
上屋構造を持っていたが、廃絶行
為として配されたものと考えられ
る。

SKS404A pit 5
(西から)



この土壙墓も周囲に小ピットが
巡る。

SKS442 (西から)



埋土下位の形成面での遺物出土
状況。

SKS404A (北西から)



この遺構の周囲を巡る小ピット
には礫が配されていた。何らかの
上屋構造を持っていたが、廃絶行
為として配されたものと考えられ
る。

SKS404A pit 5
(西から)



この土壙墓も周囲に小ピットが
巡る。

SKS442 (西から)

環状列石A内に位置する大型不整形の土壇墓。遺構上部は列石A構築の際に削平され、ごく浅くなっている。削土は列石Aの南辺および東側の沢Bへ移動する。

SKS444A (西から)



平面的な土坑形態は他の大型不整形の土壇墓と同様である。

SKS444A (東から)



長軸10mもの平面プランを有する大型不整形の土壇墓。北辺は凹地様を呈したまま環状列石Aが配される。また列石AおよびCの掘立柱建物跡の柱穴が、重複して新しく掘り込まれている。

遺跡現地保存決定後、調査未了のまま埋め戻した。

SKS469B (西から)





形成面に沿った遺物の出土状況を確認できる。

SKS476A (南から)



この遺構から北に20cm隣接して底部穿孔の倒立した土器が出土した。遺構掘り込み面より上位から連続する凹地へと変化した段階で納置されたものか。

SKS476A周囲



遺構掘り込み面より上位で多量の遺物が出土した。周辺に焼土面や土器埋設遺構が集中する。

大型不整形の土墳墓は最終的に埋没した凹地へと変化しても、祭祀土坑として使用される。

SKS478B・SK479
周辺 (南から)

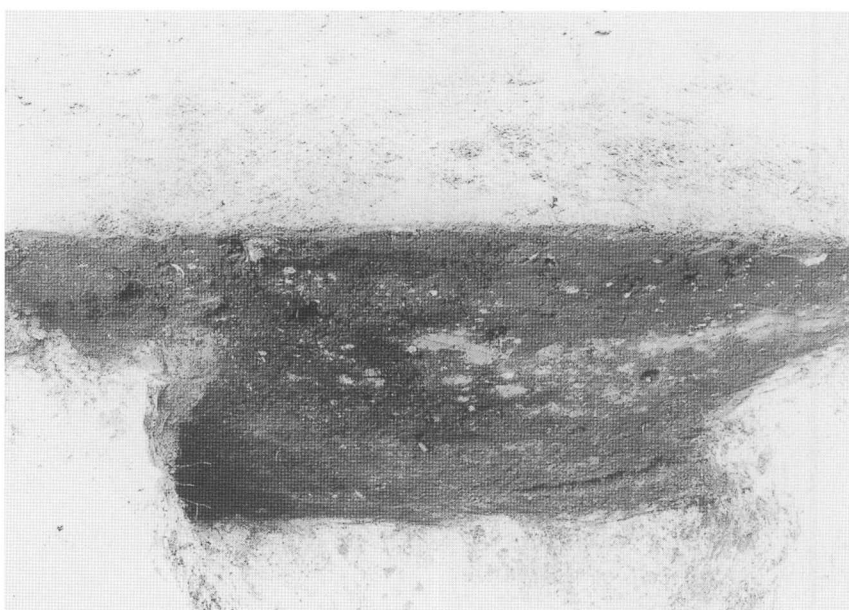
形成面に沿った遺物の出土状況
が確認できる。

SKS478B (北西から)



ローム貼り付けによる形成面が
確認できる。

SKS602 (南西から)



ローム貼り付けによる面形成と
拡張の様子が確認できる。

SKS619A (西から)





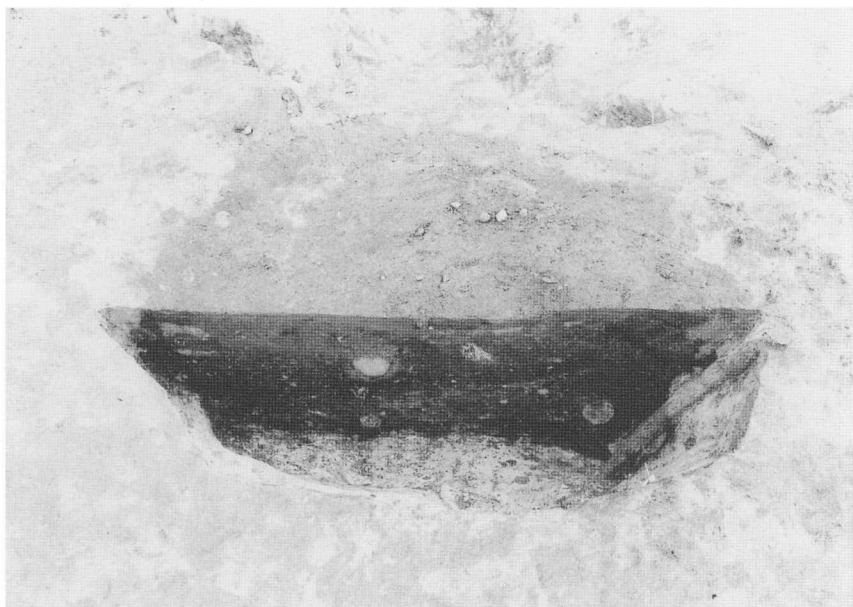
ロームと同様に焼土粒によっても面形成が行われている。

SKS619B (西から)



写真左に重複して新しい配石墓SKS700Bが存在するが、凹地を利用した一連のものかもしれない。

SKS700A (南から)

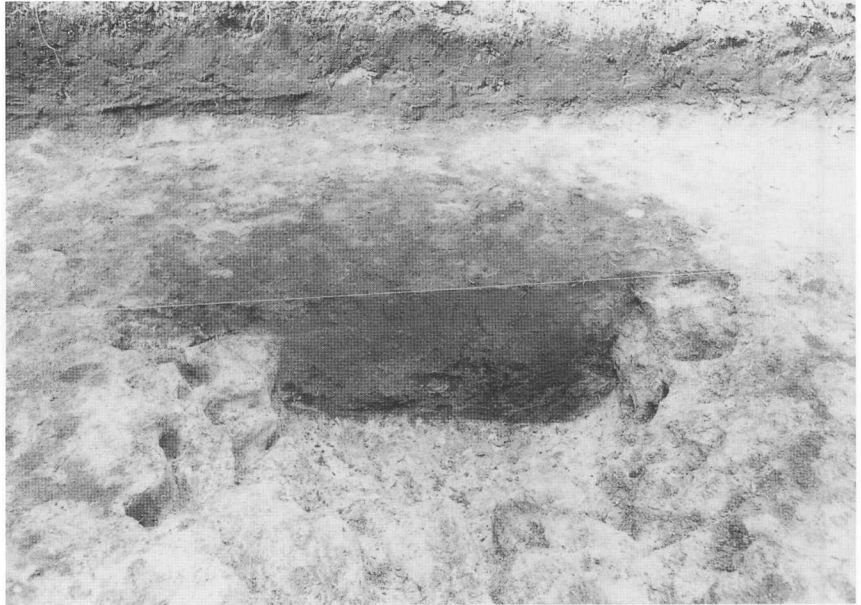


小判形土壙墓。埋土は一括埋め戻し。

SKS47 (西から)

小判形土壙墓。

SKS58 (南東から)



大型不整形の土壙墓SKS204A
に重複して新しい。小判形土壙墓。

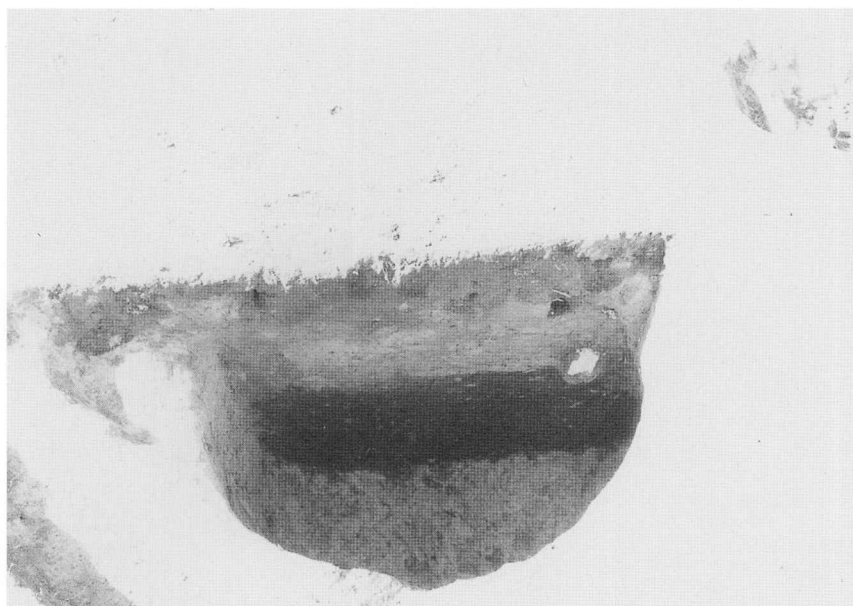
SKS204C (北から)



環状列石A内にある小判形土壙墓。
比較的深さがあり、削平され
た形跡はない。列石A構築後の所
産と思われる。

SKS440A (南から)





環状列石A内にあり、埋土上位はロームにより完全に埋められている。

SKS451 (南から)



環状列石A内にあり、重複する小判形土壇墓。副葬された土器の出土状況。

SKS494B (南西から)

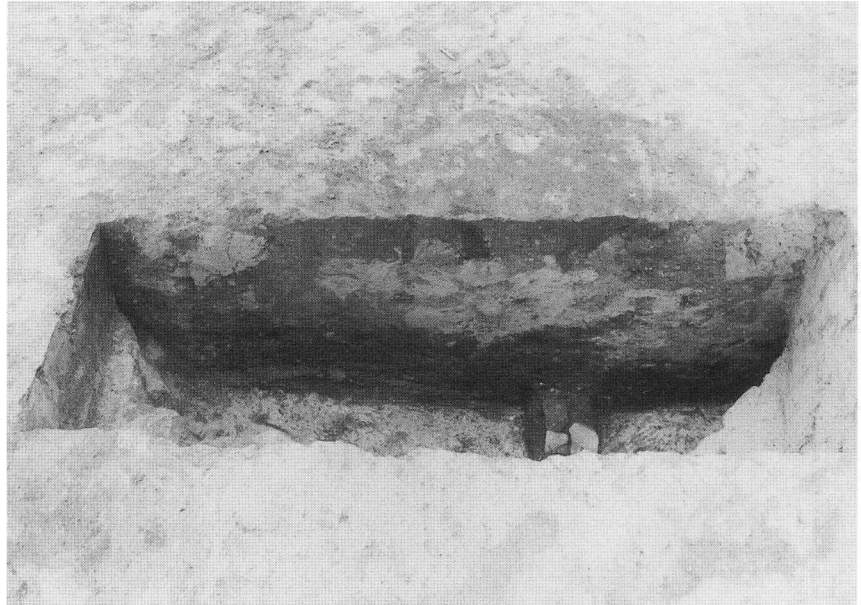


遺構確認時に鐙形土製品が出土した状況。埋土の平面観察では、遺構掘り込み面より上位の層準に伴う可能性も考えられる。

SKS512 (北から)

埋土中位～上位はロームにより
埋め戻されている。保存決定によ
り調査未了のまま埋め戻した。

S K S 5 5 4 (西から)



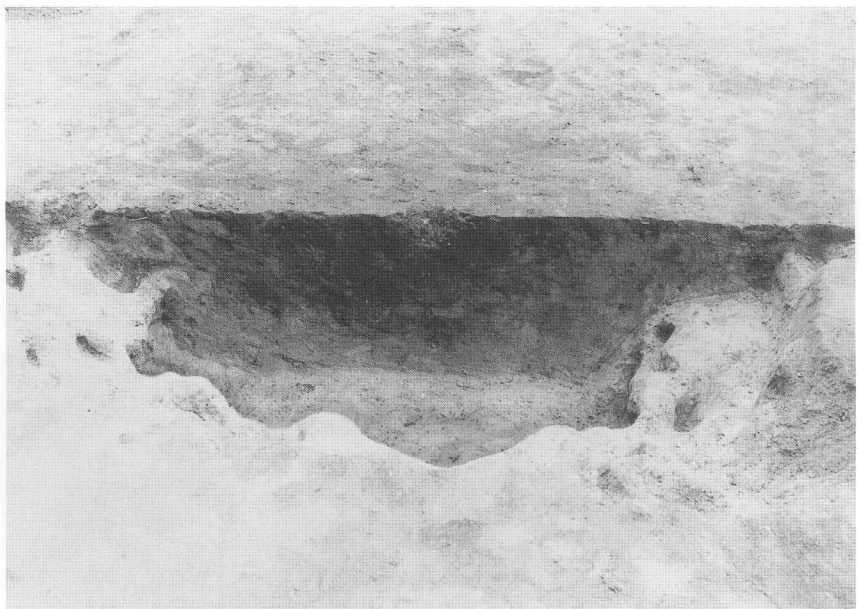
遺構底部付近の遺物出土状況。
厚手の土器(本報告の第204図
1・2)が出土している。

S K S 5 5 4 (東から)



円形土壇墓。一括埋め戻しであ
る。

S K S 2 2 (南から)





写真左側が袋状を呈する。大型不整形の土壇墓の初源かもしれない。周囲に小ビットが巡る。

SKS77 (南から)



袋状を呈する円形土壇墓。底部に副葬された土器が確認できる。

SKS142 (東から)



フラスコ状土坑を土壇墓に転用したものと思われる。新旧2時期あるのかもしれない。

SKS142 (南から)

断面位置が悪く分類が難しいが、落とし穴状土坑SKT215Bと重複し古い。周囲に小ピットが巡る。

SKS215A (南西から)



完掘状況。大型不整形の土壇墓の初源なのかもしれない。袋状の掘り込みも確認できる。

SKS215A (南西から)



写真左側は袋状に掘り込まれている。

SKS279 (西から)





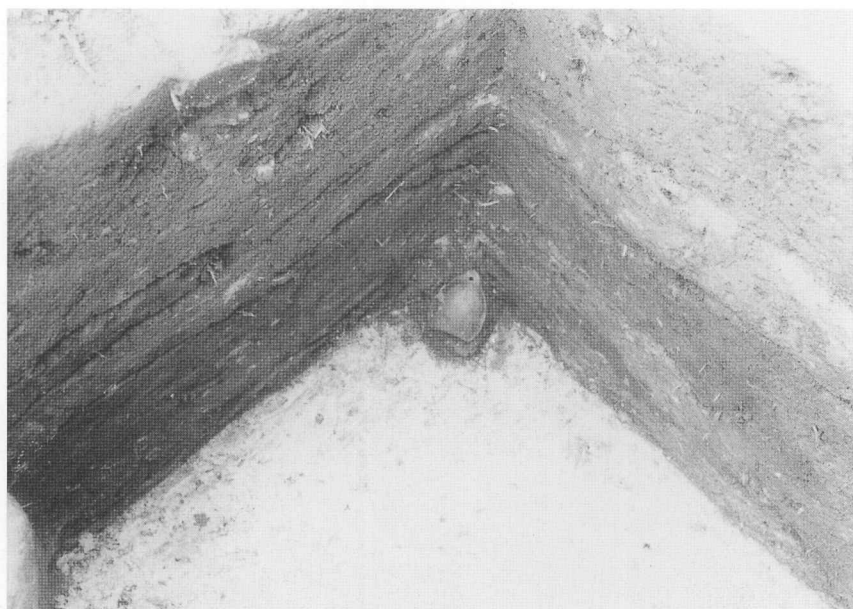
周囲に小ピットが巡る。土坑底部に対置したピットが2基設けられ、分類をSKS-eにすべきなのかもしれない。

SKS408 (南から)



埋土中位～上位はロームで埋め戻される。周囲に小ピットが巡る。

SKS614 (東から)

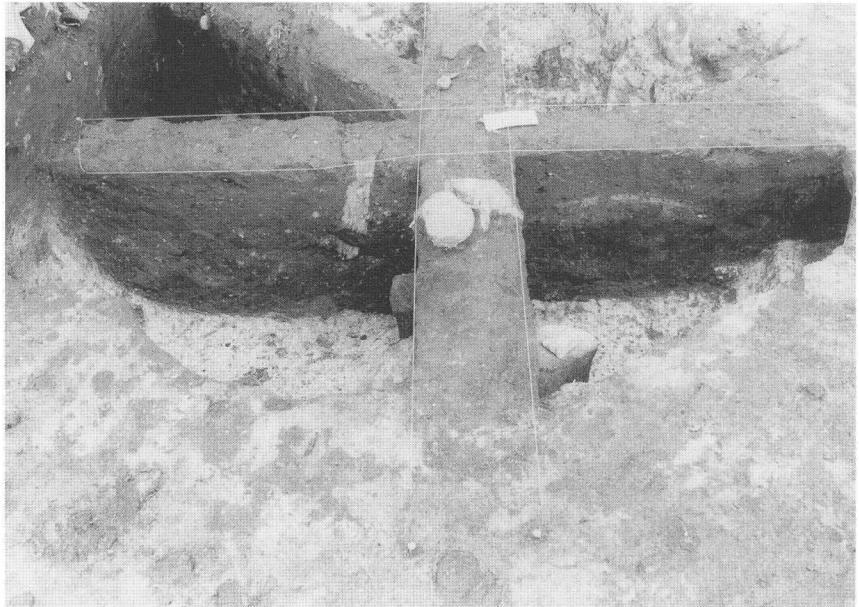


底部から鐔形土製品が出土した状況。

SKS617A (北西から)

写真右側に袋状の張り出し部が掘り込まれている。大型不整形の土壇墓の初源と考えられる。写真奥側に環状列石Cの外周の掘立柱建物跡を構成する柱穴と重複しているが、土壇墓が古い。

SKS617A (北から)



配石墓。上位の黒土(包含層)中から掘り込まれていたもの。

SKS213 (南東から)



環状列石Aより若干古手の土器が確認できる。

SKS273 (南から)





環状列石A内にある配石墓。十分な深さが残っており、列石A構築後に掘り込まれたものと考えられる。

SKS439A (西から)



環状列石A内の小型の柱穴様ピットに礫を配したものの。埋土中位に配石およびほぼ完形の土器を納置している。列石A内に複数存在するが、大多数は保存決定により未調査のまま埋め戻している。

SKS466 (西から)

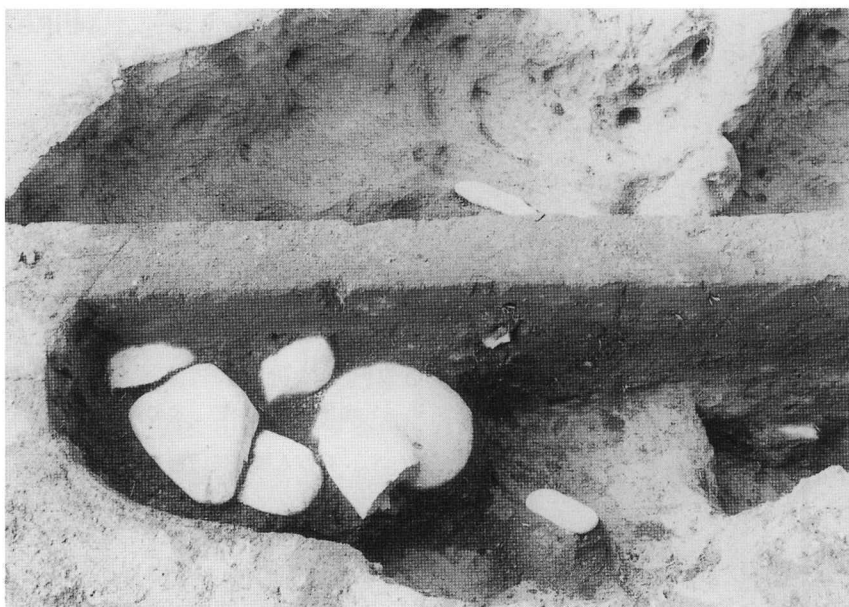


環状列石Cの外周の掘立柱建物跡を構成する柱穴と重複して新しい配石墓。

SKS609C (東から)

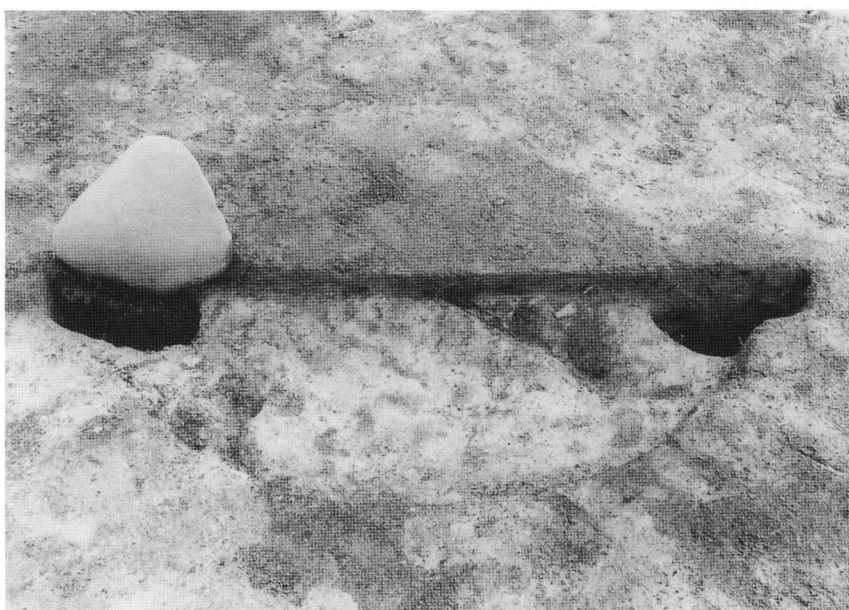
SKS700Aを参照。

SKS700B (南から)



円形の土坑に対置する2基のピットを伴うもの。またそのピットへの廃絶行為として礫が配されている。

SKS80 (北東から)



環状列石A内には、この形態の土墳墓が複数基存在する。

SKS436A (南から)





環状列石A内で一定の深さを有し、列石A構築後に掘り込まれたものと考えられる。

SKS438・494C
(北から)



環状列石A内のものだが、小型のものは極めて浅いため、墓ではない可能性もある。

SKS493 (南から)



この形態の土壌墓は環状列石A内に複数基確認し、副葬した土器を伴う状況を確認したことから土壌墓としている。

SKS494C (南から)